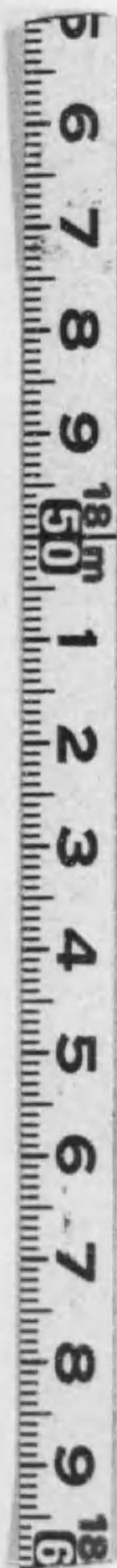


特 116

711



始

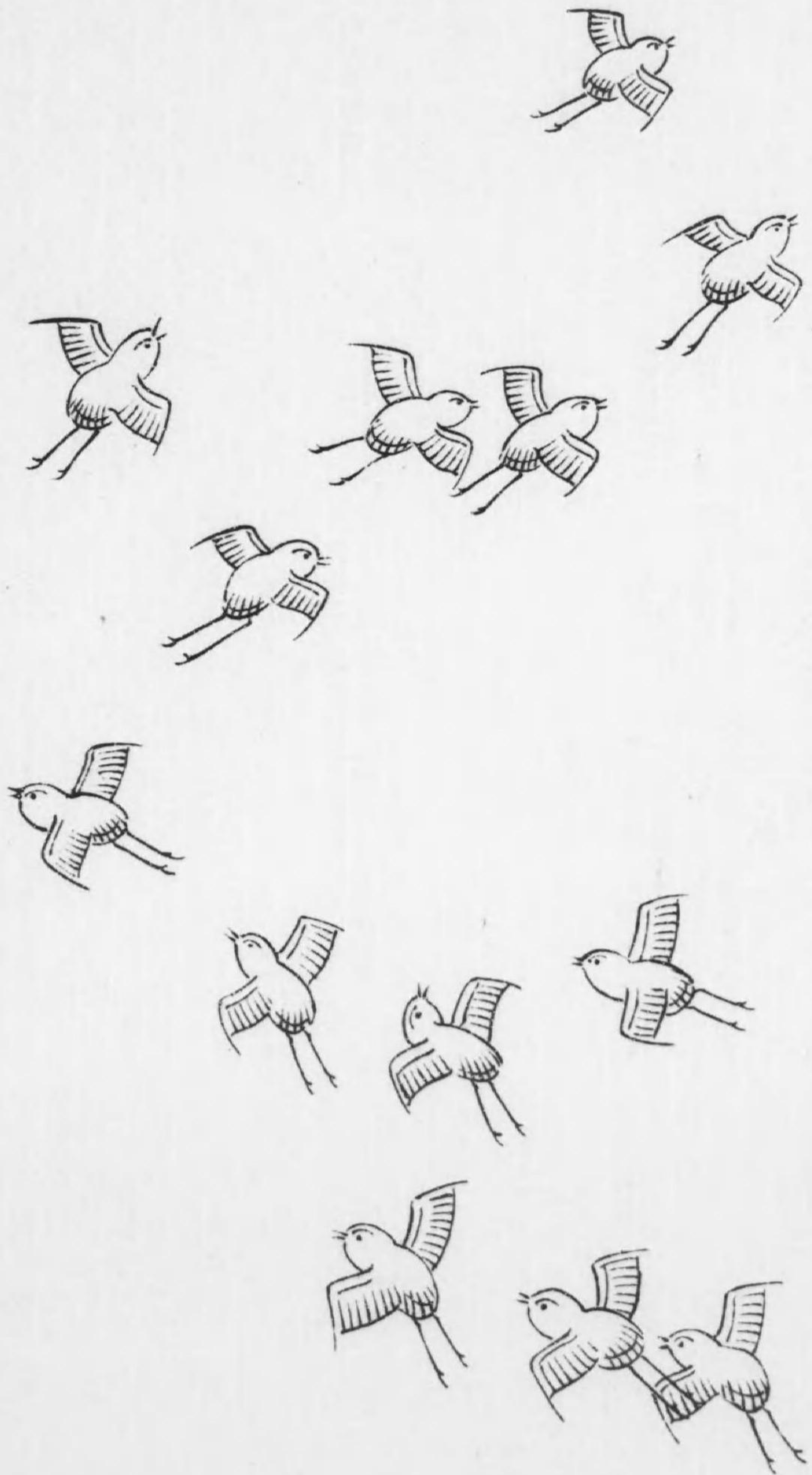


特 116

111

竹生島
大佛供養
羽衣
紅葉狩
狸

116
111



43115
781

竹生島

況説

竹生島明神に奉詣、其奇特を揮することを作れる神事能なり。能にては最初に宮の作り物を稚子方の前に出し、次第の手を離せばワキ、ワキツレ(三天匠)出で、次第次第にて竹生島奉詣の意趣を述べ、道行にて京都より島の浦に至る道程を述べ、次で船の作り物をシテ柱の前に出し、ミチ(渡邊)ツレ(女)出で、之へ来りサシ一七一等を述べ、ワキは釣舟の来るを見て便船を乞ふ。船中屋は湖上の風光を賞する流ありて島に着し、渡船業内にて辨才天を拜せしむ。ワキは女人禁制と聞ける此島に女人の来るは何故ぞと不審すれば、辨才天は女難なりとて其神徳を語り、女は忽ち社壇の内に入り、渡船も亦浪に入るとて辨才天はす。間程言ありて出流の稚子あり、地流は御殿類りに鳥動して天地異様の情景を呈す。流ふ時、作り物の鳥を下せば天女(後)ツレ流然として宮の内にあり、我は此島の辨才天とて宮より出で、天女の身を舞ふ。此れは月澄みあたる湖上に風立ち波路ぎ、急調の雅子につれて龍神(後)ツレ出現し、社壇なる舞臺をなし、天地に飛躍する状を演じて此曲を終る。前半は流景優美、後半は社壇勇烈なる曲なり。

註方、節扱、記入の解説

脇能としては佐の軽き方なり、重くならは却て耳からす。前シテは常の渡船と略同し位にて少しく抑へ静かに流ふ。後シテは龍神なれば狂進みて力強く弱々しき所あるべからず。ツレは前段一人にて流ふ處はシテよりも高く軽めに、同吟の處はシテに従ふ。ワキは素流にては一人、力ありてさらりと流ふべし。

次第(二及末) 此次第は健やかならりと流ふべし。生るいはシマル、トンを軽く發音す

竹生島

10. 3. 29
内交

べし。第二句の「鶯」の「の」は少し抑へて扱ひ次句へ流ひ續く。「島」の「は」は下ノ中、「ま」は同音位にて廻す。「指」の「も」は中を抑へて出す。

「早らぬ」の「ぬ」は「の」(一)に重なり、進行中に廻シ節四箇所あり。「早らぬ」の「ぬ」は上ノ廻シにて廻したる後の音尾を音首と同音位にして別に下げず。「間」の「の」は廻シ下ゲなれば音尾を中音に下ぐ。但し剛介にては上音と中音と音階の差極めて逃ければ耳立つ程下ぐるにあらす。「採」の「み」は中廻シにて、前の上廻シの如く廻しを張らず。且つ打切の處なれば「み」の生々字を「イイ」と二段に流ひ下ぐ。又「返」の「に」は「の」の才は下ノ中の音位にて廻シの形は上廻シに同じ。

「遠」の「の」(同)「オ」の「は」は上音より一音階高く流ひ上げ、次の「は」は前の上音に復す。「山」の「は」は上音より一音階高く流ひ上げ、次の「は」は前の上音に復す。「志」の「は」は別に下げず。「お」はオサハにて少し抑へて流ふ。常に剛介上歌の中音位の法句の前にある節附なり。

「着」の「き」はハルにて上音となり、「けり」の中音、島の浦下ノ中、にも以下、下音となるなり。

「一」の「は」(二)は「は」の時の雅子の手。公卿附き能の場合には奥の一聲にて出づ。素直に同音なし。半なれば、島の浦(同)「は」は「お」も其に二字重なり。「は」を廻シの如く突き込み生々字を極く小さくして「は」に移る。畢竟二字重なり一字重なり二字に流ふものなり。

「つ」の「は」(同)「す」は「つ」の調子高く軽めに扱ふ。決してシテの位を優すべからず。

「朝」の「は」(同)「此」は「朝」シ下ゲは常より少し多く下ぐ。こゝは「サ」の調子なりしを次は調子を更へて一セイを流ふ故なり。

「一」の「は」(同)「前」の「は」は異りて流方に於ける一種の癖。一セイの流方は位大きくすべし。

「舟」の「は」(同)「剛」の「は」は「舟」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「う」の「は」(同)「さ」の「は」は「う」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「う」の「は」(同)「さ」の「は」は「う」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「他」の「は」(同)「ひ」の「は」は「他」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「他」の「は」(同)「ひ」の「は」は「他」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「上」の「は」(同)「お」の「は」は「上」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「人」の「は」(同)「お」の「は」は「人」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「心」の「は」(同)「お」の「は」は「心」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「口」の「は」(同)「お」の「は」は「口」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「さ」の「は」(同)「お」の「は」は「さ」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「痛」の「は」(同)「お」の「は」は「痛」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

「痛」の「は」(同)「お」の「は」は「痛」の如くに出で、普通の上廻シの如く廻す。

添る時は必ず廻したる後の生字を一音階落すと注す。又廻シに下の記号あれば次ぎの
 字を下けたる儘続け、下の記号なければ次の字原音階に落す。即ち宮士なれば廻シの後
 下げたる儘なればやに幾分、あち、吹くは「」の廻シを下音に落して「吹くを中音に落す。又上
 音にて流し流くる場合の「」は「」又は其前字より落かせ、中音にて流し流くる處の「」は「
 又は其前字を落かざるを通明とす。
 なきものを（五ねま）中落シに流す。サシの中落シは略普通の中ノウキの音位に同じ。中
 音よりは少し高し。
 あれば人間に、社壇の（五ねまヨリ六ねま）刀清シ廻シには必ず次に、を添ふ。字數の關係
 上「」の後半を極めて小さくし、後と流はすして直に次の、に密接せしめ、二つの節刀
 、と普通の廻レ「」一箇だけの長さに流ふものなり。これは常に多く發音の流にあるものな
 り。廻シの後を撥れて「」を添へて流ふと見るも可なり。即ち「」に「」の如し。
 清度のちかひ（もねま）此節附を二級落シといふ。さしは中音、度は下ノ中、「」の以下は下
 音に流ふ。ぬ音の間に「」中音より下ノ中に、下ノ中より下音に流けて二級に流つる故新く
 めづくるなり。

脇能

竹生島

三月
 ワシテレ 龍才天(前々女)
 キテレ 官 神(前々漁翁)
 官 人

早次弟上 サアリ
 竹よはさるゝ鶯の。竹よはさるゝ鶯の竹。

生島詣急せん ハトフ 折とれぬ延喜の聖

代よはへ奉る臣下あり。儲も江州竹生

島の明神ハ。靈神よて座座の向。此度

君よ御暇を申し。唯今竹生島よ系

詣仕の 道行上 四の宮や。河原の宮居末

竹生島

はやまき。河原の宮居末はやまき。名もき井
 の水の月。曇らぬは代よ逢坂の関の
 宮居を伏し。押み。山越。逆。志賀の里
 鳴の浦よも著きよはけり。鳴の浦よも
 つまよはけり。 コ半白イツカリ 急ぎの程よ。鳴の浦よ
 著きよ。あれを見れば。釣舟の来りぬ。
 暫らく相待ち。便船を乞せ。やと存ぬ。

シンニサシ上
 拍子合ハズ
 真ノ一声
 コイ合

おも。ろや。頃。の。弥。生。の。半。あ。れ。ば。浪。も
 う。ら。ら。よ。海。の。面。霞。み。渡。れ。る。朝。ほ
 ら。け。 シテモイ上 長。閑。よ。通。よ。舟。の。道。う。き
 え。又。 シテサシ上 わ。た。と。あ。ま。い。ち。あ。ま。 シツカメ 此。浦。里。よ
 任。み。馴。れ。て。明。暮。運。ぶ。う。ら。う。ら。の。敷。を
 つ。て。身。ひ。ら。つ。ち。を。助。け。や。せ。ん。と。佐
 人の。ひ。ま。も。良。向。よ。明。け。暮。れ。て。せ。を

渡りて。もの憂けし。下歌 中歌ラカハシトト
打切 拍子合テ

ト。あぢあぢらせよこえたり。此海の
打切

名所多き数よ。名所多き数よ。
上歌 シツカリ
打切

浦山あけて眺むれば。志賀の都花園
打切

昔あづらの山櫻。真野の又江の船呼
打切

まわ。いねわ。まわ。いねわ。まわ。いねわ。
打切

まわ。いねわ。まわ。いねわ。まわ。いねわ。
打切

便船申せ。いね。いね。いね。いね。いね。いね。
打切

あ。いね。いね。いね。いね。いね。いね。
打切

釣舟。いね。いね。いね。いね。いね。いね。
打切

ハ竹生島。いね。いね。いね。いね。いね。いね。
打切

舟。いね。いね。いね。いね。いね。いね。
打切

ま。いね。いね。いね。いね。いね。いね。
打切

ま。いね。いね。いね。いね。いね。いね。
打切

ツレカレ上
 さらばお舟を系らせん 嬉しやさてん
 迎の舟法のかと覺えたり 舟
 殊更長閑として 心よわゆる風もあ
 名こそささあみや志賀の浦はお立ち
 ある都人う痛きや お舟よ召されて
 浦とを眺め給へや 所は海の上。所は
 海の上。國は名はのほよめお山との春

● 獨本

地下歌中
 拍子ニ合フ

あれや花はさあづら白雲の降るち残
 ころ時知らぬ山の都の富士あれや猶
 さえあへる春の日は比良のねある
 吹くともも沖漕ぐ舟よも盡き
 旅のあはしの思ひおも 舟のよそよ
 見し人もああ舟はあれ衣浦を隔
 て行く程よ竹生島も見えたりや

竹生島

四

緑樹影は沈んで、魚木よ登る気色
 あり。目海上は浮かんで、鬼も浪を奔
 る。面白の島のけりもや。船が著
 して、馬あがりや、あら嬉しや預て
 神前へ参りて、此尉が馬道志るべ
 申せしむるも、いふ。こゝろを辯才天よ
 ていよく、是祈念の、早ササリ
 早ササリ

たるものもや勝つてあがたうの不思
 議や。此島の、女人禁制といふを、承りて
 いた。あつたる、女人の何をして来らわして、そ
 して、知らぬ人の申し事をして、承くも
 此島の、久成如來の、是再誕あつた。殊よ
 女人を来さるべけれ。ツレカレ上、ササリ
 拍子三合六、のうを、いまでも
 ちよもの、ちよ、地上、ササリ
 辯才天の、女體よて、辯
 打切、辯

天の女體をて其神徳もあらたなる。
 天女と現れおきませば女人をて隔
 ち唯知らぬ人の言葉あり
 悲願を起して正覺年ひさりて
 つらわりの古へより利生更よ急らむ
 げよくあほと疑も 荒磯島の松
 蔭を便よよまらあま小舟あれた人

向よあらむとて社壇の扉を押し
 開き居殿よ入らせ給ひけれは翁も
 水中よ入るかとみら白波のまを掃り
 あれ此らみのあるぞと云ひ捨て
 また浪よ入らせ給ひけり
 出端上
 山殿頻よ鳴動して日月光り輝きて
 山の端出づるまをて現れ給よわた

宋丹中入

トけちのまき 抑こらへん。此島よきしで

神を敬い國を守る。辯才天といふ。我が事

あり 其時 虚室よ音楽聞え 其時

虚室よ音楽聞え 花ありくたる 春の

夜の月よ輝く 少女の袂かへきも

おもろや 夜遊の舞樂も時過

きて 夜遊の舞樂も時過きて 目まみ

渡の御つらよ 浪風頻よ鳴動して

下界の龍神 現れたり 龍神御よ

出現して 龍神御よ出現して 光も

輝く 金銀珠玉を彼のまねく 捧ぐる

けき ありがたかりける 奇特かな

本より衆生 濟度の誓 本より衆生

濟度の誓 誓まなくもれん 或ハ天女の

● 獨り

● 仕舞

シテ中サナリ
打打返

かたちを現し。有縁の衆生の所願を
 かなへ。又下界の龍神とあつて。國土を
 鎮め。誓をあらわし。天女の宮中よいらせ
 給へ。龍神はまなもろ御水は飛行して。
 はをけたて。水をかへて。天地よむらさ
 り大蛇のかたち。天地よむらさる大蛇の
 かたち。龍宮よとんで。のりよける。

大佛供養

汎説

平家滅亡の後、其遺臣忠七兵衛景清、常に頼朝を討たんと謀り、南都大佛供養の日、社人に扮し
 て頼朝を粗ひしも、発見せられ、終に病老を果さざりしことを外りし曲なり。能にてはツレ(母)
 先きに生か胎産に居る。次第打出しシテ(景清)登場し次第名乗子を述べ、春日野に蛇狂屋す
 と云ふ母を尋ねて袂別をなし前段を終る。(中)後段はツレ(頼朝)ワキ(従色)主東(ワキツレ三人)
 を従へて大伽藍供養の旨を述べ、春日の社人に愛装せる景清又一声にて出で、頼朝に近づ
 かんとして、淨衣の透向より漏る。武具の光に見廻はされ、寄り来る者共を斬り掃ひしが
 遂に打撲して名取あぶ丸より通り出づる窟に隠れて身を脱すに終る。四番目にして唯二
 番に代用せらる。

註方、節振、記入の解説

此曲は小袖曹我の始めと夜討曹我の後とを焼けたる如き趣あり。現在物の勇壮なる同に武
 士の情を志し、全体のさうりとしたる中に比較的變化に富める曲なり。前段は母子袂別
 の悲歎場なれば静かに、後段は勇壯なる場面なれば手短くあふくし。
 次第(一返表) 静かに唯りと出づ。但曲其音が軽きものなればさまで位を形々に及げ下。
 草の名に聞きや(同) 上音の場合に「あ」ある時は必ず其前字を浮かす。中音の場合の「あ」
 は前字を浮かさず。故に「草の」のは浮かせども、第三句の「思ふや我が」の「ふ」は浮かさず。
 いかねれば(二返表) かの色廻し、中に落す。サシの最初の下はすべて中法となり、但し
 サシの音階は普通のと多少異りてほゞ他の中ノウキに同じ。
 カヘテ(三返表) サシより下段に移る時は音調も變り、文字の運びも變るればカヘテと記

入せりなり。前よりは静かに流ふ。

神もきしへの(同)「かみ音音より振る。一教へのの、こ音尾を浮かす。

壯唐響く(同)「なにい口あれば「ア」と音尾の當りを大きく流ふ。

起きもせホ(四枚表)「お小節なり。小節は生々字を小さく出すなり。

寝もせで(同)カ、ルより上歌調に移る處けれど、其は前へかけて、音調を更へずに出す。

母も取はれと(同)「お少し浮き、強ど音を切らずにあはれと別に生づる心持に流ふ。あはれは十分にこのめて振る。

一門の舟の内(同)此上歌一章、景清と同文同節なり。こは彼れより稍さらりと振ふ。餘り

潤子を抑へずに確かりと。

おもろらやまれなりし身の(五枚表)「さおのハリより次第に浮かせ、れを掛ケ下ゲにす。掛

ケ下ゲは一字にて上音より中音まで落すなり。

頼もき(五枚裏)「き一字落なれど地返しに流なれば生々字を中音に抑ふ。

世に流れなき大佛堂(同)一セイなれど前段とは高面一轉して大佛堂の場なれば前段とは全く変わり、勢つてさらりと流ふ。

あひにあふ(六枚表)「あふ二字落の形を「あ」の生々字より少し抑へて流ふ。

面白や奈良の都の(六枚裏)サシの潤子にて勇健にさらりと流ふ。前シテより一層しつか

りともあふべし。

宮人の(七枚表)これより心持別になりて、一セイの潤子にかへてかゝつて流ふ。

神だに(同)「お三ツ掛り、ちこはこ中(振りの中廻し)に同じ。

燃養の場に立出づる(同)能にては流にて宮人に於せる景清、脇座の床几にかゝれる頼朝

と此と見、幕を捲て走りかゝるを、ワキ見るより早く其間に入りて遮る。ワキは景清の二

三足後にながすを見つゝ「これは何者なれば」と流し出すなり。

のう水波の隔と(七枚裏)「のうは前へかけて出す。

鞘つまりたる(八枚表)前へかけて出で、此一章十かゝに氣をかけて流ふ。

名のれ名のれ(同)ワキが刀の柄に手をかけシテに流寄る處なれば其心にて、二度とも前

へかけて手巻く流ふ。

陸れけり(同)ステルと流し、極く短かく流めて流ふ。

いかにやいかに(八枚裏)主衆に向つて下知する處なれば、強く確りと但し別に聲を高く下に。

そもくこれ(九枚表)大勢に向つて衣の上より流なれば、こせつかず、聲上づらぬや

うに流く流ふ。シテ最後の句なれば最も勇健なるを要す。

景清と(九枚裏)勢のかけれる地の前の一字落なれば、しつかりと大きく流ひ、生々字を少し抑ふ。

水のりもあふ(同)確かりと受けて出づ。以下修羅ノリ(又は中ノリ)と流して殊に勇ま

きノリなれば、力めて氣抜けせぬやうに流ふべし。

四五番目
畧二番目

大佛供養

九月

立ワ子シツ
兼キ方テレ
景清母
源七兵衛景清
頼朝
從者

^{シラカリト}あまのい草の名は聞きて。あまのい
^{シラカリト}草の名は聞きて。忍ぶや我が身は
^{シラカリト}ら。これの平家の侍要七兵衛景
^{シラカリト}清まてい。あれ此向の西國の方よいひ
^{シラカリト}し。宿願の子細あるよより。此程まか
^{シラカリト}りより清水よ一七日糸籠申してい。又

あまのい草

大佛供養

母の慈悲。声詞の末も頼も一き

地上歌
拍子ニ合フ

柞の森の雨露の。柞の森の雨露の。

梢も濡れ我が袖を。志ほりおねたる

涙あふ。つゝか親心かあむ母の門

送り景清もあそむを見返りて涙と

共よ別れけり涙と共よ別れけり 中入

立衆一七上
拍子ニ合ハズ

世よ隠れなき大伽藍佛の供養急

ぐちり 抑えらる源家の官軍右

大将頼朝と我が事あり 忝く

も此所寺に。聖徳天皇帝の法建立大

佛殿まであそびませ 又この君の

声威光。今このは寺よあひよあよ

立衆上歌
拍子ニ合フ

大伽藍の寺供養。大伽藍の寺供養。

光りわやく春の日の三笠の山よ景

おんまき

一ノ

六

ちいぢは前向ゆへに集るごとく思は
 りシテササリ といふ春日のばぬあるがけふの
 佛の供養場を清めの役人あるを
 何よもぢめ給らん口早かん上ササリ 春日祭よ
 ありふごとくといふ佛の供養ホトケ のう
 水はの隔と聞く時ハ佛も神も同
 一體タイ 其上貴賤の事あるよ何とて簡

み給よべき口早かん上ササリ 包むとまんと神ハ猶
 君を守りの志感光ホトケ 顯れけるが白
 張の口早かん上ササリ 脇より見ゆる具足の金物
 光を放つシテササリ 打物の地上 鞆つまりたる
 詞の末名カシテハユフ のれ名カシテハユフ のれと責めければ顯
 れたりと思ひつカシテハユフ さあぬやうとて立ち
 降り又人影は隠れけりカシテハユフ 言語道

大佛供養

廿

断の事。唯今の者をいふある者と
 存していふ。平家の侍悪七兵衛景
 清もいふ。いふ。我が君をねらひ申せ
 存の程よ。警固の者よ申しつけ討ち
 さらせむやと存い拍子合に文いふやいふ
 警固の兵たりかよ聞け。唯今見え
 きたる者をばや討つ取つて来らせよと。

さも高聲よ下知まれば地畏つて
 いそで。かねて用意の警固の兵皆一
 同よ。まじり駭ぐシテ和シタリ其時景清又立ち
 出で。思ふは。いふ。まじり畏れあつたらん
 の恥辱もなむかひあむかひ。今一た刀の
 打ち合ひて。重ねて時節を待つべしと。
 大音あびて呼ぶらひり健カニ拵とてい

平家の侍。悪七兵衛景清と名止要健ニサリ名の
 りもあへむあざ丸と名大弟ニ連スのりもあへむ
 あざ丸と名。きつと抜き持ちまき向ひ。
 大勢よあつてみだり上上カスも固め
 誓固あつても四方へまきもぞ逃げよ
 ける中よ其者者進み出で。きり懸
 けてちやもあつた。ひらりと飛して。

手もあつた。忽ち勝負を見せよ
 けり今景清と名までありと。あ
 祈念を致し。あカケテサリあざ丸と名。さ
 ちやせむ。霧をまき隠れまき春日山茂カケテ
 みよ飛び入り。落しける。又こそ時
 節を待つべし。と。虚空よ聲して
 失せよけり。

羽衣

況説

能にては最初松の作り物を舞臺に出し、松の枝に天人の羽衣に擬したる長絹を掛く。一声の雅子にてワキはツレ二人(共に渡史)を従へて出て、長閑なる春色に誘はれ釣にまぐたる旨を語り、浦の景色を眺めつゝある所に、松にかゝれる羽衣を見とり、家の實になさばやと取りて帰らんとする所にも、幕上りてシテ(天人)は「の」其衣は何方にて獲と呼びかけながら現れ来り、是は天の羽衣と容易く人間に與ふべきものにあらずは逃し難といふ。渡史惜みて返さず。天人は羽衣なきては天上へ帰ることかなはずといた。く悲めりやうり、渡史も憐れを催し、天人の舞臺を臺し給はば返さんといふ。天人は衣を返されば舞はんといふに、渡史は衣を返さば舞はずして天に上りやせんといひ、いかに疑は人間にあり、更に偽なきものごとと恥ぢしめられ、遂に衣を返す。かくて天人はかの衣を着(後見座に在り)長絹を着す。之を物着と称す月宮殿の有様を語り、数々の舞を舞ふて天に昇るといふに終る。祝言詠の三番目に用ひらるゝを常とし、流しものとして愛敬せらるゝこと二百番中の首座にあり。流し物文學として千古の傑作なり。

護方、節振、記入の解説

三際清見留士安鷹の秀麗なる晚鐘を背景とし、春色點染たる曙の空に天人の羽衣を纏して舞ふといふ曲なれば、通して爽やかな晴々としたる味あふくし。上半の羽衣を美びて悲む一段は全篇を引き立つる為の支の強ければ其心を以て深く憂愁に陥いるを好まず。景注にてはワキツレを要せず、ワキ一人にて可なり。

月夜

一

流し物、渡史にて(一)衣、ふた、(二)若に二字添、但し「は」は「は」は四字添なり。又「は」

「その生ミ字より少し抑へて流ふ。次はワキツレとの同音とならざるべき處なればなり。

時しもや (四) 「は」の連シ下ゲ僅かに下げて流ふ。耳三つ程に下へべからず。

ね原の (四) サシの句末の字直節なれば必ず引くを法とす。その引キの長さは一字最後の長さに同じ。たゞ節あると節なきとの相違にて其引法は同一ならざるべからず。即ち茲にては亦なる「起り」晴れかの一字流と時しもやね原のの引キと同寸法に流ふべきものなり。

朝かすみ (四) 「ふ」はフリたる後を更に拖むる如く流ふ。

天の原、眺にも (一) 「な」は下ノ中に流し、下ノ中の音位にて廻す。

心空なる雲色かな (四) 「なる」は下ノ中の音位、色」の音の連シを下音に流す。

忘れぬや山路 (四) 「め」のやと「山」のやとを重ぬぬや、次のやと別に流す。

山路を分けぬ (四) 「山」路をわ下ノ中の音位、けて以下、下音。

はるかに三條の松影に (四) 「はるかに」と節附あるも同様なり。「は」下音、「る」下ノ中に浮かせ、か又下音となり、「に」三條のま中音により、「つ」下ノ中、「ば」らに下音となる。此ね原には中音より下ノ中となり下音に下がるものなれば二段流しと終す。

まぢつれいさや (四) 「ま」は中音を少し抑ふる如くに流ふ。「れ」下ノ中、「い」其音位にて廻し下音に下ぐ。「通」はん以下の音位削して終す。

のう其衣は (一) 「の」の呼びかけは新かに出せ、大きく、ワキの流し終るや直ぐに出すは耳からず、一息間を置きて寛やかに出すべし。以下シテの流、天女なればとて殊更に女性的の声を真似るは非なり。十分に力をこめて声の振ひを新かに自主たぬやあぐし、せんかたむ (四) 「た」は中流しなり。カ、ルの中の中流しなれば喉普通の中ノ流キの高さに流すなり。

かぎりのはなも (四) 「は」のクリ、後をつけて張り上げ、「な」の入り連シはクリの音位を續け

て地物中、連シの後の生ミ字とアーアーと段をつけて流ひ、上音に下ぐ。

雲霞蔽ひて行く (四) 「まどひて」のま中音にて廻し下音に下がり、「て」は下音にて廻す故、廻したる後の音尾は若古に流し、行くいは下音に流す。

力へズ (四) 普通サシより下段に移つる場合は音調を更ふるものなれど、茲は知らずもの下音の音調をより、ほみ馴れしと中音に出で、別に音調を更へざるを以て特に力へズと記入せらるなり。

ゆくかかへふか (四) 「ゆくか」を少し流め、「帰るか」と分けるやうにし、かかを連續せしむべからず。所謂、切らずに流ふべき處なり。「帰るか」のは掛け下げに流ひ流す。下の七

枚表、春の曙も流に同じ。

物着 (五) 「な」能の時シテ羽衣に擬したる長柄をワキより受取り、後見座に往きて之を着ることを云ふ。柔流にても少し向を置きて次を流すべし。

舞ふとかや (六) 「お」は小節なり。生ミ字を極めて小さく出す。

東遊の藤河舞 (四) 地次第なれば、前の方、ルとは調子更りて流く、且つ上音なれども力カルの上音よりは稍低くめに取って流ふ。

クリ (四) クセの前なるサシの前にある短き音にて、クリ入音の節ありて中音に終る一種の終。シテ又はツレより流ふと、地にて流ふとの二種あり、地にて流ふをクリ地と終す。クリ地はクリ入音の節ある處は大きく、直節の處は運びて流ふ。

其調子を流めずして、大方のままで流す、のの入り連シを流して上音に流す。柔流のクリ地にあ入り連シと普通の入り連シとは斯か其流方を異にす。普通の入り連シの後の連シを小さくし、クリ地の場合は入りの後の連シを大にするなり。

天の原トコ及びトコあき身トコのトコ眺トコまもトコ心トコそら
 ちるトコ氣色トコあトコあトコ忘トコれめトコやトコぬトコ路トコを
 わけて清見トコ海トコ邊トコよトコ三保トコの松原トコよトコまトコち
 つれいトコばトコやトコ通トコむトコらトコいトコばトコ通トコむトコらトコ
 風トコむトコかトコよトコ雲トコの浮トコ波トコたトコつトコと見トコてトコ雲トコの
 浮トコ波トコたトコつトコと見トコてトコ釣トコせトコぐトコらトコやトコ岸トコむトコらトコん
 待トコてトコまトコぎトコらトコ春トコあトコらトコらトコ吹トコくトコもトコのトコあトコけトコ味トコ

朝トコ風トコのトコ松トコの常トコ磐トコの聲トコぞトコかトコらトコ波トコの
 音トコあトコきトコ朝トコあトコきトコよトコ釣トコ人トコ多トコきトコ山トコ舟トコあトコあトコ
 釣トコ人トコ多トコきトコ山トコ舟トコあトコあトコわトコれトコ三保トコの松トコ
 原トコよトコうトコ浦トコの氣トコ色トコをトコあトコがトコむトコるトコ所トコよトコ
 虚トコ空トコよトコ花トコ降トコりトコ音トコ樂トコ向トコえトコ靈トコ香トコ四トコ方トコよトコ
 薫トコむトコこトコしたトコいトコまトコの思トコをトコあトコげトコたトコよトコこれ
 あトコらトコ松トコよトコ美トコきトコ衣トコ懸トコわトコつトコ寄トコりトコて見トコ

わび色イロカ香妙カキエの——で常ツラシの衣ユロビをあはせて。
 いらねお取トつて帰カヘつておまへ入イりお見ミせ。
 家の寶タカラもあはれやと存シる。
シテ 静ニ美シクのう其
 衣ユロビは此ココ方のナタのよそで。何ナニもあはれに
ワサライして拾ヒひたる衣ユロビを程ほどは取トつて帰カヘつ
 りよ。
シテ 静ニ美シクおまへ入イりお見ミせ。
 入イりお見ミせ。
シテ 静ニ美シクおまへ入イりお見ミせ。

おまへ入イりお見ミせ。
 如ごとくお置オキきを終ハへ。
シテ 静ニ美シクおまへ入イりお見ミせ。
 末マツせの幸キ持トり留トめ置オキきを國クニの寶タカラを
 あまぐさあはれ。衣ユロビを
 悲カナしやち羽衣ウロビをくつて飛ヒ行コウの道ミチも
 絶タえ。天テン下ゲは帰カヘらして事コトもあはれ。
 ちうとて返カヘらして終ハへ。
早カニ上サライ此ココ序シ詞ジを
ヨクハス
拍子ニ合ハス

聞くよりのも。よく白龍力をえもと

よりの此身いづれも。天の羽衣をうそく。

かまよまゝして立ちのけが。今もなま

から天人も。羽もき鳥の如くまでよらん

とまれば衣あり。地よ又住めば下界

あり。いづれもあらんか。あらん悲

めど。白龍衣を返さねば。か及んば

早シカリ下カト方も。地上シカリの露の玉萬がざりの

花も志をくそ。天人の五衰も目の前

に見えて淡まり。や天の原。ありさけ

見れば霞立つ。雲も感ひて。行く知ら

きも。地下歌ササリ中ササリ女メ駒ウマれ。空よりうら行く

雲の羨まき氣色あな。上歌ササリ加カ陵レイ

頻伽の駒れ駒れ。加カ陵レイ頻伽の駒れ

●小 詠

目 文

目

馴れ。聲今更よ僅ある。雁の帰り
 行く。天踏を聞けがあら。や千鳥鷗
 の沖つ浪。ゆく帰る春風の空よ吹く
 まであつちや。や空よ吹くまであつちや。
 早陽 カンツテ
 し。よ申。片姿を。目奉る。餘り。痛
 ち。く。程。よ。衣。を。返。申。さ。し。の。ま。て。
シテ 氣ヲ引立テ
 あら嬉。や此方へ賜。う。入。暫。く。
コトヲ抑ハテ

あつち

あつち

承り及びたる。夫人の舞樂。唯今こ
 ろ。奏。給。さ。し。衣。を。返。申。さ。し。
シテ サラト出
 嬉。や。此。方。へ。賜。う。入。暫。く。

シテ
 此。悦。び。よ。も。て。み。な。ら。し。入。回。の。話。の。
 形見の舞。目。宮。を。廻。ら。も。舞。曲。あり。
 唯。今。こ。も。て。奏。し。つ。や。の。こ。も。入。よ
 傳。さ。し。あ。つ。ち。ら。衣。を。く。し。あ。つ。ち。ら。

返らば舞曲をなすを其まふよ天もや
 おどり給ふま 疑入向あり。
 天は鶴もまものち あり恥ぢやさら
 だきて羽衣を返一與ふれや 物著 少女ハ
 衣を著しつ 霞裳羽衣の曲を
 天の羽衣風よ和 雨は霞裳の袖

一曲を奏で 舞ふまや 東遊の
 駿河舞。東遊の駿河舞此時や 始な
 ころん くれ上 大キクニヒト 又ハ
 出せの古へ 十方世界を定めよ 空ハ
 限もあけられん 久方の空を名づけ
 たり 然るは 皇殿の有様玉弁
 の修理さしあ入りて 白衣黒衣の

月夜

六

●サシと書キ

天人の敷を三五よ分つて一月夜の
 天少女奉仕を定め役をなまむ
 敷ある天少女 日の桂の身をわけて
 假し東の駿河舞。世よ傳へたる曲と
 かや袖子合テ春霞。たまひきまよけり久方の
 日の桂の花や咲く。げよ花あづら色め
 くる春のまゝかや。面白や天女らで。

も妙あり天つ風。雲の通路吹きまらよ。
 少女の姿。志どし留まりて。此松原の
 春の色を三保が崎。月清見高富士の
 雲どつれや春の曙。たまひはも松風も
 長閑なる浦の有様。其上天地ハ。何を隔
 てし玉垣の内外の神のはまよ。目も
 曇らぬ日の本や。君が代ハ。天の羽衣

まれば来て 撫づらも盡きぬ殿ぞと。
 向くも妙なり東歌。聲添へて数々の
 笙笛琴の聲。後孤雲の外は充ち充
 ちて。落日のくれあわの蘇命。路の山
 をうらして。緑の波は浮島が。拂ふ嵐よ
 花ありて。げよ雲を廻らも白雪の袖ぞ
 妙ある。南無帰命。自天子。本地

大勢至 地上 ありま遊の舞の曲 序ノ舞
 シテカ上 ありひの天つは空の緑の衣。又ハ春
 立ち霞の衣。色香も妙あり少女
 の裳裾。さやよさ。さやよ。舞の
 花やさの天の羽袖。靡くも返まも。
 舞のそで。東遊の。数々。東遊の
 数々。其も月の。夜人ハ。三五夜中の。

仕舞

司反

空よ又満月真如の影とあり。は願圓滿
 國土成就七寶充滿の寶を降ら。ち
 國よこれや施給する程は時後
 引矢の羽衣浦風よたあびきたあびく。
 三保の松原浮島が雲の愛鷹ぬや
 富士の高嶺もまきりてありてま矢つあ
 空の霞よまきりて失せよけり。

紅葉狩

汎説

餘五將軍平維茂、戸隠山に於て鬼女を退治せしことを作れる曲なり。能たては最初山に紅葉を掃したる作り物を舞臺に出す。次第の雅子にて華鬘なる装ひをせし美女(シテツレ)三人、五人或は七人を伴ひて出で、次第より上敷まを流し、秋原き山路に紅葉狩する由を云ふ。こゝに相言方の性士出で、幕を張り宴席を設くることを述べ。一声の雅子にて維茂(ワキ)は主東(主東)敷人を従へて去り、橋掛に列びてサシ以下を流し、座將に來れる旨を述べ。次いで遠に美女觀楓の宴を開けりを見て怪しむ、性者をして之を尋ねしめしが、遂に妖鬼の計に陥り、宴席に引き入れられ、酒を飲み酔ひ伏すを、鬼女は舞ひながら見すまじ作り物の中に隠れ、ツレ亦鼻に入る(中入)代りて向む言末はの神現はれ、八幡宮の使として靈剣を維茂に授け警告して去る。維茂は夢に驚き醒めて立ち上れば、地流は雷火亂れ大風吹き、物流き山中の光景を流し、鬼女は鬼神の體を現はして作り物の中より躍り出で維茂に對ひ主廻りをなす。鬼女は敵は木にて巖石に擬したる作り物に取り付くを維茂引き下し切りたふすに於る。此曲五番目切能に用ひられ、前半は後美草屋、後半は唯性流渡に於て二番中の傑作に数へらる。

詠方、節取、記入の解説

前シテは美女なれども鬼神の假装せるものなればさきや後を靜に取らず。聲取ひにも心ばかり地味を合ませ常の女の如く優雅を本とせず。故に、神に明かじといふも三番目物の如く幽玄なる味を持つ處更に無し。
 次第(一収表) 次第は常に上音に出づ。いそぐより浮かせてもみおちり中音に下がり、第二

句(返し)の時、上音に復し、^二を^三にて再び中音に下り、漸次浮かせて上音に張り、^四もみぢにて
三たび中音に下り、第三句に流し續け、^五た^六わ^七ん^八にて真の下音となる。

女にて、今ははや(同)、「ハ」は二字落し、「ハ」は一字落し。共に其前字を浮かすべからず。
誰白雪の(同)、「雪」にて浮かし、「の」にて中に落す。サシの最初の「下」は常に中落シとなり、サシ

の中音は他の揚處に於ける中音より高きものなること既に属し説明せり。
さみしきに、庭の白鳥(同)、「に」はフリウキと絡み、振りつゝ浮かすなり。竹生島の春

なればのウキブリとは異なり、彼は浮かしたる儘振るなり。
人こそ見えぬ(同)、「ひ」とはサシの中落シの次にあるハリなれば普通サシの上音より一段高

く十分に振る。「は」は前例と同じく中落しなり。
下敷カヘテ(二枚表) これまでサシの調子なりしが、こゝより下敷となるを以て音調を交へて音

調の中音にて出づ。サシは指甲がりの声、下敷は指乙がりの声とも謂ふべし。
上最、下紅葉(同) 上敷の初めの五文字に句切あるものは引かずに美しく流し切る。

夜の間の雲や波のつらん(同) 上敷の返しの一句シテツレ同吟の聲はツレのみにて流す。
木のもとに(三枚表) 「に」に持ち一あり、「に」の音首より下がるにあらず、前字の上音を受け

一字にて上音より中ノウキを経て中音まで流し下がるなり。斯る流方を「下下」と云ふ。
まぢ寄りや、^一精^二を^三(同) 「て」の色音に、ヤヲハの間あれば「テ」エーウーンと大きく流し、「ま

は」句中にある色音となれば「テ」シーと普通の音に流す。共に音尾を落せども別た「下」の
記号なれば、次の字は中音に復す。

狩場の末(同) 氣色む(三枚表) 下ノ中、「は」も下ノ中、「か」も下ノ中に廻り下音に落す。
かなふまじと(三枚裏) 「と」の一字落し、地落しの處なれば音尾を抑ふ。

うちどけや(四枚表) サシの中落し、一枚表、誰白雪の^一と^二同音^三に^四下^五る。

色見えけるかいかせん(同) 「け」のハリはサシの中落しより来るハリなれば、普通
の上音より一段高く振る。「か」には「か」のイロ廻シの下がりたる音尾を受けて「に」の入り廻
シを大きく流す。「か」の廻シにて下り、「か」の音首と同音尾にありて入り廻シを流すにあらず。
まぢ寄りや(四枚裏) 「り」の生々字より中落しに下る。

クリ(五枚表) クリ地は特殊の節附ある處は大きく、直節の處はさらりと運ぶ。句末の字直
節なれば引くことサシに同じ。

たのしとかやま(同) 「し」は中音の入り廻し、短とあるも同じ。本エリはクリ地の終り、中
音尾にあるもの。「かや、アアア、アアア、アア」と流す。

くねなるま(五枚裏) 「に」フリウキに浮かし、「れ」のハリ普通の音より一段高く振る。
これとを(六枚表) クセ上端の終り、間の記入なれば引かずに美しく流し切る。

堪へず紅葉(六枚裏) 「葉」の「オ」を三ツエリに流す。
中ノ舞(同) 中ノ舞は其位、静かなる序ノ舞と早舞との中間にある舞といふ意にて名づけ

しもの、五段を正式とするも三段に略さるることあり。篇に連れて舞ふものにて流の伴は
ざるものなれば、流方に關係なし。

ワカ(同) 舞の後にある短き一節の名。短き舞の後に必ず有るとは限らず。
あふあふ(七枚表) あめの入りの後に一音あるのみにて直に又クリに續くを以て入りの

後の「上音まで落す暇なく、上ノウキまで一寸落して」のクリを流す。
カハル、月待つ推の(同) これまでハノリ地なりしが、月待つ云々以下普通の調子とならな

より「カハル」と記入せらるなり。
面をもくまきやうま(八枚表) 「ま」少し抑へて流し切る。次の「騒」がずしての「でも」同じ。

五番目

紅葉狩

九月

ワシツ
キテレ

大(四人又三人)
鬼女(前女)
平舞
者(セコ大セイ)

浮次身上朗カニ
拍子三合ア

時雨をいそぐ紅葉狩。時雨をいそぐ
 紅葉狩。漢ま山路を尋ねん
 此あたりよほむ女をい
 へて浮世よほむ今のはや誰白雲の
 ハ重葎茂れ宿のさみまよ。人こそ
 見えね秋の来て。庭の白菊。うつつよ

せう誰ぞとも。知らせ給をぬ道のへの。
二字書
 便よ立ち寄り給へ給。思ひよらむ。
一字書
 の馬事や。何一もむむむ給よ。
カレ上
 情あつたあやも。過は行けむ。
一字書
 情あつたあや。一村雨の雨宿り。丹桂
一字書
 の蔭よ。立ち寄りて。一河の流れを。
地上
 酌む酒を。いそいで見きて給よ。

●小菫

●獨吟

一あつたあやも。袂よまがり留むれが。さもが
イコ
 岩木よあらむれが。心弱くも立ち寄り。
イコ
 所山路の菊の酒何か。昔一あや。
カレ上
 げよ。や虎溪を出で。いそいで。
拍子二合ハク
 ちが捨てがたま。人の情の益の。集ま
甲
 のためとあや。林向の酒を。暖めて。
甲
 紅葉を焼くあや。びよ面白や所から。
紅葉

紅葉

五

飛んであつた。飛びさうびと組み
 鬼神のまじり刺通す所を頭を
 擲んであつた。斬りはらひ
 給へば、怒りて嚴へのぼる。お
 あり刺通し鬼神を従へ給へ。
 威勢の程こそ怒りけれ。

程々

汎説

唐王陽江に極める程々、孝子に無蓋蕪の酒壺を典へ、又己も酒に酔うて舞を舞ふことを
 作り。昔は前後二級より成る曲なりしも、祝言能として漁するに短きを使とし、後世前
 半を看きワキの名まより直に待流に續けて半能の形式とせり。能にてはワキ名末笛にて出
 て、待流まで流ひ了れば太鼓の打出ありて下流の舞子あり、シテ江上に浮び出づる心にて
 全身赤装にて出場するなり。目出たき祝言能として常に切能に用ひらる。又能には乱とて
 重き習事あり。又乱の替に雙之舞、置壺、和合之舞など程々二人出で、演ずることあり。

謠方、節板、記入の解説

通じて祝言を旨とし暢びく、と大らかに流ふべし。此曲初學者の警告するものなれば、程
 々簡易なるが如く看做さるるも、拍子の上には渡り拍子の流方など専門家も特に注意を要
 する程なれば、之を嚴密に正確に流はんことは頗る難事なり。
 時より時よりけしにや (二枚表) 剛今上音にて出で、きたりのたを浮かせ心に地の、りは中
 音に添すなれど、別に耳立つ程下げず、そは剛今の上音中音の音階の差甚だ近く、さした
 る高低なけれはなり。初學者、下の字に氣を奪はれ一途に音を下げんと思ひ、流り易けれ
 は注意を要す。にやのには下ノ中に添し、やは下ノ中の音にて廻し、廻しの後の音尾を
 抑へめに下ぐ。

身となりて外 (二枚裏) りては前のにやと同じく下ノ中の音階、外のソオの廻しと下音に添す。
 澤陽の (二枚表) のは上ノ廻し。上音にて、ノと張りて廻し、生々字「オ」を音首と同音階
 の上音に復す。

夜もすがら(同)「夜」の廻シは前に同じ。がらは中音に落すけれど、前字の「す」を浮かせ心に持たすのみにて甚しく下げず。

また傾くる(同)「ま」初に當るが如く出で、降り上げ、其音位を受けて地めずたの入りと流る。さかづきの(同)剛今佳句の前にある常の抑へなり。

持ち居たり影をたいて(同)「ち」にて上音となり、「た」中音、「り」の「下」と「か」の廻シは下中、げど中音に復し、「た」下中、「い」以下下音となる。

下流(同)下流は舞ひながら出るやうの物に用ひる雅子の名。而して「老いせぬや以下をサガリハ地と称し、渡り拍子と称する太鼓の手あり。此箇處を拍子正しく流はんことは頗る難しとせらるるものなり。

薬の名をも苗の水(同)三箇ともスクと流シなり。初にスクと流シあり、次に中流シあり、後に下となるが通則にて、流にも次に「益」にて中流シとなり、浮かみ出で、下に下となる。

御酒と聞く(二三表)「と」は上ノ廻シ。柔吟にても廻シの形は剛吟に同じ。

名取ははりや(同)「は」の入り廻シは廻したる後を上音ヨで流さず、上ノウキまで下りたるまゝにて次の「の」クリに流し流くるなり。

舞の舞を舞はるよ(二三表)「よ」は上抑へにて上音を抑ふる心にて流ふ、普通の中音にあらず、「の」春は前字「舞」の「イ」を浮かし、春の初を上ノウキにて流し、上音に落す、中ノウキまで下ぐるにあらず。

どうと打ち(同)「打ち」にて剛吟と変る。大きく流く、但し無理ならぬやう。

岸津を渡る浦風(同)一セイの調子にて寛たりと節奏大きく流ふ。

五番目ヨリ末(切能)

猩猩

九月

ワシテ 高風

早付

これハ唐人金山の麓。揚子の里は高

風と申も民とてい。さてもわれ親よ孝

あるよより。ある夜不思議の夢を見入る。

揚子の市は出で、酒を賣るあらば。富

貴の身とあるべし。教のまゝよあるを

業の時去り時来りけるよや。次第

星

次第は富貴の身とありてい。又さよ
 不思議ある事のい。市女は来り酒を
 飲む者のい。盃の數は重なるも。面
 色は更には変らざる程。餘り不審
 なる。名を尋ねてい。海中は棲む
 猩猩とあや申の程。今日、涿陽の
 江に出で。かの猩猩を待たせると存の

上歌
相子ニ合フ

涿陽の江のほとりまで。涿陽の江の
 ほとりまで。菊をたぐて夜もまがら。
 月の前にも友待つや。又傾くる盃の
 影をたぐて待ち居たり影をたぐて
 待ち居たり。老いせぬや。老いせぬや。
 薬の名をも菊の水。盃も浮み出で。
 友よあよぞ嬉しき。此友よ幸よぞうれ

●小
詠

里
星



飲めどもあきらぬ秋の夜の盃。影も
 傾くは江も並たつるもみづらうく。
 多ひよ酔たる枕の夢のさむらと
 思へば泉のそのま。畫きせぬ宿とて。
 めでたけれ。

大正十年三月三十日印刷
 大正十年三月三十日發行
 觀世流改訂本
 初心者皆喜用
 訂正者 丸 岡 桂
 東京市神田区今川小路三丁目九番地
 發行者 土居源太郎
 東京市神田区東松町十二番地
 印刷者 鈴木 彌 作
 東京市神田区東松町十二番地
 印刷所 信英堂印刷所
 東京市神田区今川小路三丁目九番地
 發行所 觀世流改訂本刊行會
 電話九段 二二三〇 五番
 振替東京 一三四七 五番



終

